

## 京大看護学校事件と天皇巡幸

## 一

## 『小倉南科大学校舎住居』

前回の朝鮮戦争前後の京都の学生運動の研究状況の紹介で言っていた、新しい資料の発掘を続けているという話を書いたら、その資料のいくつかを、紹介しろと編集者から言われた。そこで戦後の学生運動の歴史をふり返りながら、二、三回の資料紹介を書くことにする。

## 一 GHQの見た

## 京大看護学校事件

戦後の京都の学生運動のなかでの最初の大事件は、一九四九年五月一日の京大の看護学校事件である。この日、厚生女学部（いわゆる「看護学校」）の学生六名が、京大医学部病院に採用されず、学生と病院が対立して、戦後初めて京大に警官隊が導入され、三名の学生が逮捕された事件である（『学園新聞』）。

この事件については京都大学の『百年史』にも書かれており、資料の一部も紹介されているが、次のGHQ文書は、あまり知られていない。「昭和二十四年五月二十日」付けの京都連絡調整事務局の「執務年月報 第三十号」によると、「京大事件に関する件」として次のように書かれている。

京大病院厚生女学部卒業生六名の看護婦不採用にからむ紛争は、五月中旬、不採用看護婦のハンストを最高潮として、その後学生代表及び病院側との間に四名採用、その他妥協点を決定し、解決したかにみえたが、五月十八日覚書の調印を病院側が拒否し、一方京都市警察では永田局長以下警官三百名が大学構内に出動して、学生代表三名を面会強要容疑で逮捕したため、事件は採用問題より転じて学園の自治と云う根本問題にまで大きく発展した。

このことによって、「一部進歩的教授、助教授」は、「大学自治の改革に邁進する声明書を発表した」。学生のなかでも「左右の対立が激しくなりつつある」と指摘しているが、GHQは、「本件学生側の動きは、東京にある共産学生同盟によって指導されている情報もあるので、京都軍政部では本件を重視して大学総長、市警局長、検事など関係者を招致」して状況を聴取している、と書いている。この報告は、今では『日本占領・外交関係資料集 第二期』の第七巻に収録されている

ので、簡単に見ることができる。

私が、京大の「看護学校事件」の話をも初めて聞いたのは、それこそ一九六九年の大学闘争の頃で、当時京大の憲法学の教授であった川口是氏に、大学の自主講座で「七〇年安保」の話などをしてもらっていた時、余談で「看護学校事件」の話になり、「自分はまだ学生で、共産党にも入っていなかったが、この闘争で看護学校の学生組織は、壊滅的な打撃を受けた。その時の罪の意識から、組合の仕事などを持ってこれられても、断れないのだ」という話をされていた。その後も、京大を辞めて知事選に立候補して、早世された。今となつては詳しい話が聞けなかったのが残念である。

## 二 昭和天皇の巡幸

一九五〇年には、レット・ページ反對闘争があるが、これについては京大の補導部員で処分する側にいた吉川幸次郎氏の回想（『中国の知恵』）や高橋和巳の一連の小説があるが、豊田善次氏の『高橋和巳の回想』（構想社）が一番詳しい。

ここでは、翌五一年の京大天皇事件の前提となった、昭和天皇の近畿地方への巡幸について書いておきたい。この巡幸は、まさに昭和天皇による、敗戦後の天皇制の存続をかけた一大イベントであった。最近でも多くの書物や写真集がだされているが、これが平和裏に進められたように書くのは、まさに歴史の偽造である。「宮内庁 行幸

啓 昭和二十六年 総理府公文 巻十四」という資料が、国立公文書館にある。そこには、次のような一月一七日に配布された、三重県共産党のビラの写しがある。

巡幸をめぐるアジビラ散布について

天皇陛下の三重県巡幸に対して本十七日早朝、日共中勢委員会では別添写のような内容を、謄写版刷（半紙四ツ切）したアジビラを津市内の主要路上で、通行人に多数配布した。なお、県下その他の地域では未だ発見されていない。

天皇をこんなまでして

十何年前ふりかて天皇が来県するということで、半年も前から「天皇奉迎準備」がすすめられている。国民の象徴である天皇が、復興途上の日本の姿、国民の生活を御視察になるというと聞えもよいが、大さわぎを一寸横から冷静に考えてみるとどうだろう？

市町村や県では、莫大な予算を使って、知事官舎に太いガス管を引いて、ガス風呂を作ったり、アメリカ製の自動車を買いこんだり、表通りだけは舗装や清掃に大さわぎで、役所や警察は日常の仕事もソツチのけになっていく。しかもこの金は差押え公売までしてとりあげた税金だ。津市では百万円の予算だそうだが、実際には二百万円以上使われるだろう。私たちは血と汗の税金がやたらと使われているのでは、「街がきれいになるからよい」等とのんきなこともいつておられない。本当の国民の生活みたいのなら水戸黄門のようにおしのびでやってくるのがよい。そこには配給の米もとれずに、寒さに向って窓ガラスも破れ放しの教室がある。反面料理やへ入りびたりの官僚や戦争景気でボロもつけのものがいる。こんな目かくしの視察に名をかる行幸が大さわぎをやっているスキに国会では講和

安全保障の両条約がウヤムヤのうちに自由党の手で可決されようとしている。結局「天皇行幸」は、国民に一文の利益を与えるところか、損害をかけ毎日の生活苦をゴマかすための人形行列で、東条らが利用した天皇制復活に外ならない。

- 1、税金は国民の利益のために使え！
  - 2、天皇制廃止、大統領制の樹立！
  - 3、おかざりの天皇をかつぎまわるな！
  - 4、日本の独立と平和をおかす講和条約反対！
- 日本共産党中勢地区委員会

京大天皇事件の直後に撒かれたビラである。内容は、民衆の生活が困窮しているなかで、天皇の行幸に、なぜ大金が使われるのか、という批判が書かれている。しかし、この行幸が日米の講和・安保両条約の隠蔽のために使われていることは、明確に指摘されている。しかも、「天皇制廃止、大統領制の樹立」という要求も書かれている。

共産党の非合法機関紙『平和と独立』では、「天皇、血税のなかを歩く―三重椎茸協組、献上品を拒る」(七三号、一九五二年一月二〇日)と書かれている。当時の三重県は、労働、農民、部落解放運動の先進地域であり、同紙でも、「六百の警官包囲下に 籠城一昼夜 斗いぬいた自由労働者 三重松坂」という、有名な松阪市の「職安占拠事件」の記事が掲載されている。これら『平和と独立』などの記事から、天皇制打倒の問題が当時の共産党の主要な闘争課題であったことがわかる。